HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	恐慌の抽象的可能性:商品に内在する諸矛盾とその実現する運動形態
Author(s)	唐渡, 興宣
Citation	北海道大學　經濟學研究, 29(1), 163-187
Issue Date	1979-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31448
Type	departmental bulletin paper
File Information	29(1)_P163-187.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

恐慌の抽象的可能性

—— 商品に内在する諸矛盾とその実現する運動形態 ——

唐渡興宣

第一節　恐慌の抽象的可能性

恐慌の抽象的可能性は直接的な商品の変態運動W—G—Wそのもののうちに与えられる。W—G—Wという商品の変態運動は販売と購買の二局面に振りかわられた一過程であり，この過程は二つの相異なる段階を過程的契機として進行するところの一つの運動である。この運動が通過する二つの局面は，必然的な相互依存関係にある二つの契機をなしており，W—GとG—Wは過程的に連関しあっている。だが，他方では，販売と購買とは相互に依存しあう一全体にもかかわらず，相互に無関心に存在し，時間的，場所的に分離されており，この分離された両過程は自立化し，相互に排除しあう対極をなす両契機でもある。

恐慌の可能性が商品変態W—G—Wという単純な形式のうちに存在しているということは，本質的には相互補足的な諸契機が分裂し，独立し，相互に無関心に振るまい，バラバラになるという可能性が存在しているということに他ならない。

販売W—Gがなされるならば，購買G—Wには何らの困難はない。貨幣はすべての使用価値と直接的な交換可能性の形態にあるからである。W—Gがなされるかぎり，販売は購買によって補足されており，他方では，購買はまた販売によって補足されている。すなわち，販売と購買は，販売（または購買）がなされるかぎり，二人の対極的に対立する人物の一つの同一的行為であり，販売と購買は同一性にある。

だが，W—Gがなされて後に，販売者が引き続き購買をなすという保障は

ない。他の人が購買しないでは誰も販売しえない。商品は貨幣に転化されなければならないが，貨幣は直ちに商品に転化されなければならないということが強制されるわけではない。ここにW—Gが困難となる。販売と購買の分裂のうちにW—Gの困難となる可能性があり，したがって商品流通そのもののうちに恐慌の可能性がある。W—Gがなされなくなるという可能性が商品流通に含まれているとはいえ，商品がいかにして，何故に，売れなくなるのか，ということは示されていない。

商品流通W—G—Wは物々交換における商品の譲渡と他人のそれの譲り受けとの直接的同一性を販売と購買との対立に分裂させることによって，生産物交換の時間的，場所的，および個人的な諸限界を打ち破る。貨幣によって商品交換は商品流通となり，それは全商品生産社会において普遍化する。商品の姿態変換は商品流通の環をなし，個々の商品の姿態変換の中断は他の自立的な姿態変換系列の連鎖の中断の可能性を意味する。個々の商品の姿態変換系列の描く循環は，他の諸商品の描く循環と絡み合い，もつれあい，その総体は商品流通を形成している。したがって，商品流通は同時に，商品の全般的な実現不能ということが生ずる可能性を内蔵している。

「自立的に相互に対応しあっている諸過程が一の内的統一を形成するということは，まさに，それらの過程の内的統一は外的諸対立において運動するということを意味する。内的に非自立的なものの外的な自立化が特定の点まで進行すると，統一が一の恐慌を通して暴力的に自己を主張する」(『資本論』等1部，上，長谷部文雄訳，青木書店，234頁，以下，『資』Ⅰ，234頁と略記する)

恐慌の可能性は商品変態のうちに与えられているが，この販売と購買の分裂は，何故に自立化した過程の諸局面が恐慌によってのみ内的な統一を自己貫徹させるような衝突に至るのかは，示していない。商品の売れないという恐慌の形態は，その内容を持たない。したがって，動因を持たない，抽象的，一般的形態に他ならない。

とはいえ，商品流通は一つの運動であり，運動であるかぎりは，それ自身

の運動の内的原因を有する。一つの運動が外的な力によって動くがぎりでは，その運動は他者に依存する運動であり，それは自立的な運動ではない。この運動を実現する内在的な動力こそ，商品流通に内在する矛盾に他ならない。商品流通に内在する矛盾は商品そのもののうちにある諸契機の現実的な矛盾でなければならない。商品の変態という運動を措定する矛盾はマルクスによって次の如く指示されている。

「商品に内在的な使用価値との対立，私的労働が同時に直接的に社会的な労働として現われねばならぬという対立，特殊的，具体的労働が同時に抽象的，一般的労働としてのみ意義を持つという対立，物象の人格化と人格の物象化との対立――こうした内在的矛盾……」（同上，234頁）

かかる商品の変態運動のうちに内在する諸矛盾は，商品変態W―G―Wの運動において止揚されるのではなく，これらの矛盾がそれにおいて運動しうる形態を措定するものに他ならない。いいかえるならば，商品流通は諸商品の交換過程のうちに内在する諸矛盾が，その外的表現形態と運動形態を得たものである。それでは，いかにして交換関係，交換過程のうちに内在する諸矛盾が，自己の外的な表現形態と運動形態を創造するのかを，検討しよう。

第二節　商品の価値形態と商品に内在する矛盾

我々はすでに「諸商品の交換価値または交換関係から出発して，そこに隠されている諸商品の価値の足跡を発見した」（『資本論』Ⅰ，133頁）すなわち，価値形態論に先行する第1節「商品の二要因――使用価値と価値」及び，第2節「商品で表示される労働の二重性格」において，交換関係に置かれた商品から，商品の二要因，それをもたらすところの労働の二重性を発見した。使用価値と価値，具体的有用労働と抽象的人間労働の区別がなされた。今や，この区別が商品と商品との社会的関係＝価値関係においていかなる外的表現形態を受けとるかを見よう。

商品は価値と使用価値からなるということは一つの矛盾である。更に，直接的には私的労働として行なわれる具体的有用労働が同時にそれとは区別さ

れる抽象的人間労働でなければならず，その形態において社会的労働でなければならないということが，商品と商品との外的対立において，価値関係に媒介された価値表現関係という外的な表現形態を受けとる。このことがいかになされるのか，ということの解明は「価値形態論」の課題であった。価値としての商品が人間的労働という社会的単位の対象化であるかぎりでのみ，それは価値対象性を有し，したがって価値は純粋に社会的なものである。したがって，価値は商品と商品との社会的関係においてのみ現象する。

商品A＝商品Bの等置関係において，Aは相対的価値形態に，Bは等価形態にあり，Aはその価値をBそのもので表現し，Bはこの価値表現関係にあっては，その材料として役立つ。AはBなしには自己の価値表現をなしえないし，BはAなくしては等価形態たりえない。両者は相互に依存しあう関係にある。他方で，Aは同時に相対的価値形態であると共に等価形態であることはできないし，また，Bについてもしかりである。両者は対極的に排除しあう二極である。相対的価値形態と等価形態は相互依存性と相互排除性を含んだところの対立する二契機である。

マルクスは価値表現において次の如く，指摘する。A＝Bにあって，BがAの価値を表現するのは，Aがまず Bに対して自分は価値としてBに等しく，したがってBと交換できるのだということによってではなく，Bは価値としてAに等しく，いつでもAと交換できるのだ，ということによってである。Bを等価物，すなわち，価値物 (Wertding) たらしめることによって，ついで価値物たるBとの連関によってAの価値存在 (Wertsein) が現われてくる。

Bが価値物として亜麻布に等置されることにより，Bに含まれている労働がAに含まれている労働に等置される。すなわち，Bを生み出した具体的有用労働は価値を形成する労働に還元され，同時に，A＝Bという等置関係を通じて，Aをつくる具体的有用労働も価値形成的労働として，抽象的人間労働に還元される。すなわち，商品A＝商品Bという価値表現関係を通じて，かかる「廻り道」を通じてAを生産する労働が価値形成的労働であるという

独自的性格が歩み出てくる。具体的有用労働が直接に等置され，相互に依存せしめられるのではなく，価値形態を通じて連関せしめられているのである。かかる「廻り道」を通じて，Aを生産する労働の独自性を発見するのである。

商品A＝商品Bという等置関係を通じて，この「廻り道」を通って，Aを生み出した労働が価値を形成する労働であること，「相対的価値形態の内実をつきとめた。この労働の独自的性格を発見するだけでは，価値表現が終ったわけではない。ここで思考を停止させてはならない。今度は逆に，Aを形成する労働がそのまま価値となるのではなく，その労働が対象化された形態において価値になるのであるから，A商品の価値を労働の対象化されたものとして表現するということ，すなわちAそのもの，その物理的なその商品体とは異なる，Aと他の商品とに共通な一の「対象化」として表現されなければならない。価値表現の本題はまさにここにある。価値表現はここから始まる。

Aとの価値関係においては，Bは，それが一つの価値として，Aと質的に同等なものとして，同じ本性を持つものとして意義を持つ。だから，Bはここではそれにおいて価値が現象するところの物として，その自然形態において価値が表示されるところの物として意義を持つ。Bそのものは単なる使用価値に他ならず，価値対象性を一片も含まないが，A＝Bという価値関係においてBはAと同じ人間労働を対象化したものであり，BはAと同じ本性を共有するものとなり，Bそのものが「価値の担い手」となる。Bは価値関係において体化された価値，価値体として意義を持つ。価値を形成する労働はBという商品体そのもの，物そのものにおいて，その対象性が実現する。マルクスはこの点を亜麻布＝上衣という連関において説明する。

「ひとは見る，――商品価値の分析がさきに吾々に語った一切のことは，亜麻布が他の商品たる上衣と交わりを結ぶや否や，亜麻布それ自身がこれを語るということを，ただ亜麻布は，それのみが精通する言葉たる商品語でそれの思想を洩らす，ということだけのことである。人間的労働という抽象的属性における労働がそれ自身の価値を形成するということを語るために，亜麻布は云う――上衣は，それが亜麻布と同等な意味をもつかぎり，つまり価

値であるかぎり，亜麻布が成り立つのと同じ労働から成り立っている，と。亜麻布の崇高な価値対象性はゴツゴツした亜麻布の体とは異なるものだということを語るために，亜麻布は云う，――価値は上衣のように見え，したがって亜麻布そのものは，価値物としては上衣と同等なること瓜二つである。」(『資本論』Ⅰ，140～141頁)

我々の理論の歩みは『資本論』と同じように，まず，上衣，したがってBが等価物にされることから出発した。「亜麻布の価値のみが表現されるのだ。では，如何にしてか？亜麻布が，それの『等価』あるいはそれと『交換されうるもの』としての上衣に連関することによってである」，と。

だが，このことが「廻り道」を通じたところの価値表現であると解するならば，価値表現はここで解決されたものとなり，後段での価値としての亜麻布が上衣と価値関係を結ぶことによって上衣が価値物として，価値の現象形態として亜麻布の価値を表現するのだということを展開していることの意味がわからなくなる。

このことを理解するためには，我々はマルクスの反省概念を知らなければならない。この反省規定はヘーゲルの反省規定を駆使しているのである。直接的な反省とは仮象である。このことをヘーゲルは，その反省という語源にまでさかのぼってつきとめる[1]。すなわち，反省は英語でreflexionであるが，この直換的意味は反射，反射光である。reflectといえば，反射する，がその第一義的語義として辞書に登場する。人の眼には光は直接的には鏡から発するかのように見える。だが，これは仮象なのであって，鏡から発する光はその光源を持っている。その光源をつきとめなければ，その光の何たるかはわからない。マルクスは光源としての相対的価値形態の内実を発見するために，その仮象から出発したのである。すなわち，A＝Bという等置においてBは生まれながらにして等価物であることをその属性としているように見える。この等価形態の謎から出発したのでめる。結果から，現象から考察するという結果論的思考，すなわち追思考(Nachdenken)を行っているのである。かかる追思考こそ反省的思考であり，学問的思考の本質をなす。上衣が等価

として亜麻布に連関せしめられているという，あるがままの現象から出発して，そこから光源としての「相対的価値形態の内実」としての独自な価値形成的労働を発見したのである。現象のうちに内在し，内実をつきとめたのである。ついで，それがどのように現象するかを示したのである。すなわち，価値としてのA，または亜麻布と価値関係を結ぶB（または上衣）がその等置関係において等価たらしめ，したがって亜麻布は自己を価値物として自覚するのである。上衣は価値として，亜麻布と質的に同等なものとして意義を有し，したがって，上衣において亜麻布の価値が現象するのである。

したがって，Bを直接に等価物としてAに等置し，価値表現することを「廻り道」による価値表現だ，ということになれば，これはむしろ「廻り道」をしているのではなく，直接人々の意識に反映されているところのものを本質と解したところの直接的な歩き方なのである。いわゆる「廻り道」による価値表現は久留間教授によって提起され，多くの支持者を得ている。教授は商品の価値が他商品の使用価値で表示されるということがいかようにして可能かという問題を提起され，次の如く説明される。

「……商品は，直接自分を他商品に等置することによって自分は価値なのだと自称する代りに，まずもって他商品を自分に等置することによってそれに価値物としての定在をあたえ，そうした上ではじめて，その他商品の自然形態で自らを表現しうるのであって，これが本当の意味の廻り道なのであり，マルクスが『廻り道』といっているのもこの意味にほかならない。」[2)]

久留間教授は上衣に等価物としての定在を与え，もって価値表現がなされるとされる。亜麻布が上衣に価値の定在をまずもって与え，ついでその上衣でもって亜麻布の価値を表現するとされる。だが，一体，何の権利があって亜麻布にそのようなことができるのか。何故に，先験的にそのような力を亜麻布に与えるのか。マルクスは，等価形態の謎，すなわち，それは貨幣形態において最も発展し，人々の意識を支配しているところの，生まれながらにして，直接交換可能な形態にあるように見える謎，かかる生まれながらにして等価物であるという仮象的現実を出発点においているのである。現実に誰

もが貨幣に対して以上のように等置しているのである。

それでは「廻り道」とはいかなる意味において解すればよいであろうか。マルクスは亜麻布＝上衣というこの直接的な反省から出発し，この等置において上衣をつくる労働と亜麻布をつくる労働が等置され，この現実的な相異なる諸労働が同等な価値形成的な人間労働に還元し，もって，亜麻布をつくる労働の独自的性格をつきとめた。すなわち，相対的価値形態の内実を発見したのである。亜麻布をつくる労働が具体的有用労働であると同時に，その対立者である抽象的人間労働であるという独自形態が与えられるのは，亜麻布＝上衣という価値形態を通じなければならないということである。人々が相互のために労働をすれば，その労働は社会的労働という形態を受けとる。だが，商品生産社会にあっては，私的労働が同時に社会的労働という形態を受けとるのは，同じく生産物と生産物との関係を通じなければならないということ，このことが「廻り道」なのである。すなわち，相対的価値形態の内実はこの「廻り道」にしたがって発見されたのである。上衣を等価形態たらしめるのは相対的価値形態の内実としての価値をつくる独自的労働であり，これがより根源的である。それが等価形態において価値の現象形態を措定するのも，物と物との関係という「廻り道」を通じなければならないのである。

マルクスは以上の反省的思考について次の如く説く。

「かくして，価値関係に媒介されて，商品Ｂの自然的形態が商品Ａの価値形態となる。あるいは，商品Ｂの体が商品Ａの価値鏡となる。商品Ａは，価値体としての，人間労働の物質化としての，商品Ｂに連関することによって，使用価値Ｂをば，それ自身の価値表現たらしめる。商品Ａの価値は，かように商品Ｂの使用価値で表現されることによって，相対的価値の形態をとるのである。」（同上，141頁）

相対的価値形態の分析の結論的部分において，商品Ｂの体が商品Ａの価値鏡となるという場合，マルクスのこの結論が反省的思考に駆り立てられて進行した論理展開の帰結であるということが理解されなければ，価値鏡における「鏡」も単なる比喩的な洒落程度のものとしてしか解されないであろう。

下平尾教授は久留間教授を批判して，価値形態論の課題は価値を形成する労働の独自的性格の意義を解明することであるとされた。この点で，一歩前進した。[3] だが，ここで立ち止まることなく，相対的価値形態の内実としての価値も「廻り道」を通じて現象しなければならないということに進むべきであった。すなわち，A＝Bという等置関係を通じて，すなわち，「廻り道」を通じて，内実をつきとめたからには，これは同じ道を通じてまた現象する。対象に内在し，対象の内在的法則を発見すれば，この同じ内在的法則に従って思考すれば，この法則と同じ結果に達するのである。

もし，下平尾教授が反省概念の何たるかを十分理解していれば，問題のより積極的解明がなされたはずである。下平尾教授は反省概念を相互依存性においてのみ把握され，事実上，反省＝対立とされている。宇野教授批判のあまり，相対的価値形態と等価形態との反省関係から矛盾を追放されてしまっている。この点について，下平尾教授は次の如く主張される。

「両者（価値と使用価値――筆者）は，商品の二つの要因として相互に前提しあい，条件づけあう関係に立つので，互いに矛盾，闘争しあう関係にはたっていない。したがって両者を矛盾概念とみて，価値によって統一されるのだとはいえない。使用価値と価値との対立は価値形態においては相対的価値形態と等価形態との対立，両極性に配分されるにすぎない。[4]」

この主張が宇野教授の如く，価値形態論において矛盾を前面に押し出す主張に向けられるかぎり，一定の有効性を持つ。だが，「対立」のうちに含まれる相互排除性，矛盾性を追放し，対立を相互依存性，相互制約性においてのみ見るならば，明らかに行きすぎがある。矛盾を語るためには，相互依存性がまず語られなければならない。何の連関もないところに矛盾はないからである。相互依存性は第一義的に強調されなければならない。だが，「相対的価値形態と等価形態とは，同じ価値表現の，互いに従属しあう，相互に制約しあう，不可分離な二契約であるが，しかし同時に排除しあう，または対立させられた，両極端，両極である。」（『資』Ⅰ，134～135頁）というマルクスの指摘においても明白であるように，対立のうちには相互排除性が含まれ

ているのであり，対立を矛盾と見ないことにより，対立のうちにある矛盾性を，したがって反省関係から矛盾性を追放するということは反省概念を極めて狭いものとする。

価値形態論において，いかなる反省関係があるかを考察しよう。価値形態論に先立って，マルクスは価値と使用価値，具体的有用労働と抽象的人間労働を区別した。この区別は抽象によって得られた，思惟物である。そのかぎりで，マルクスの判断に属するものであり，したがって，マルクスの思考において把握されたものである。したがって，この区別は即自的な矛盾，直接的な矛盾である。

「商品が第一には，その自然的定在形態において，その交換価値を観念的に含んでいる一定の生産物として，第二には逆に，生産物の自然的定在形態との連関をすべてなげすてた，発現した交換価値（潜貨幣）として，二重の存在をもっているという簡単な事実，――この二重の異なった存在は区別に，対立に，そして矛盾に進行しなければならない。[5]」

すなわち，区別→対立→矛盾という発展のうちに矛盾が把握されなければならない。最後の矛盾こそ本来の矛盾であり，この本来の矛盾を追思考し，その最も簡単な契機として区別を抽象し，この区別から発生的に矛盾を展開しなければならない。区別は矛盾の発生源であり，それは対立に上向しなければならない。価値形態論において矛盾は対立として措定される。商品の分析によって措定された区別（即自的矛盾）は，対象自身に内在して発見されたものであるが，それは認識主体の側における知性によって得られるところの主観的過程に属するだけではない。こうした区別は，対象自身がその運動においてしていることなのである。

「商品価値の分析がさきに吾々に語った一切のことは，亜麻布が他の商品たる上衣と交りを結ぶや否や，亜麻布それ自身がこれを語るということを。ただ亜麻布は，それのみが精通する言葉たる商品語でそれの思想を洩らす，というだけのことである。」（同上，140頁）

亜麻布＝上衣という関係において，価値と使用価値との区別を表示してい

るのである。

「商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的対立は，一の外的対立によって，すなわち，二つの商品の関係――そこでは，それの価値が表現されるべき一方の商品は直接には使用価値としてのみ意義をもち，それで価値が表現される他方の商品はこれに反して直接には交換価値としてのみ意義をもつところの，二つの商品の関係――によって表示される。かくして，一商品の簡単な価値形態は，その商品に含まれている使用価値と価値との対立の簡単な現象である。」（同上，155頁）

簡単な価値形態において，使用価値と価値の区別を外的に表示するばかりか，その区別を対立として外的に表示しているのであり，商品自身がそれを示しているのである。対立は相互依存性のみならず，相互に排除する矛盾性を内蔵し，それ自身の運動において，すなわち，亜麻布＝上衣という形態を措定することによって，自己を外化するところの対自的矛盾なのである。価値は超感性的，社会的なものであり，使用価値は感性的，自然的なものである。両者は相互に依存しあっている。だが，社会的ということは自然的ということを一片も含まず，それを排除する。他方では自然的ということは社会的ということを否定する。両者が商品における二側面として固有であるということは，一つの矛盾である。このことが外的に表示されているのである。亜麻布＝上衣という形態において，自己を表現している対自的矛盾なのである。相互に排除するという対立の矛盾性は相互依存性を土台にしている。このことは強調されなければならない。何の連関もないものに矛盾は存在しない。だが，対立は矛盾ではないということによって，矛盾性を見ないならば，対立は相互依存性，調和関係としてのみ解されることになる。反省関係は区別，対立，矛盾をその諸契機とする極めて広大な概念である。

価値表現の主体はあくまでも相対的価値形態にある。この関係を踏まえた上で，等価形態の独自性を見るならば，それは次の如く現われる。

第一に，等価形態はその使用価値がその対立者たる価値の現象形態となるということ。

第二に，具体的有用労働がその対立者たる抽象的人間労働の現象形態になるということ。

第三に，私的労働が直接に，その対立者たる社会的労働となるということ。

簡単なA＝Bという交換関係に含まれる価値形態は商品に内在する対立の現象形態として，外的対立においてその内的対立を表現する形態として意義を持つ。

この簡単な価値形態は価値表現において欠陥を有しており，この欠陥を克服する形態に発展し，それは更に，一般的価値形態にいたる。商品は自己の価値表現に最もふさわしい形態を商品の本性そのものから措定する。他方では，一般的価値形態において，商品に内在する対立，矛盾の完成した外的表現形態が獲得される。

商品世界の共同事業によってはじき出される商品に一般的等価形態という性格を捺しつけ，他の全ての商品に対して直接交換可能性の形態に置く。展開された価値形態からこの一般的価値形態への移行において，いかにしてその移行が可能であるか，という問題が存在する。価値形態論では，商品に内在する矛盾がいかに解決されるのか，ということは示されていない。それは交換過程に属する問題である。ここではその解決された形態のみが示されているのである。一般的価値形態において，商品に内在する矛盾が個人的，場所的，時間，限諸界を打破し，普遍的に措定され，その普遍的な表現形態を受けとる。一般的等価形態はその物的形態において，人間的一般的労働の化身として，一般的，社会的な蛹化として存在する。一般的等価物を生産する私的労働たる具体的有用労働は他のすべての具体的有用労働と同等の形態に置かれることを通じて，その労働は，人間労働一般の現象形態となる。かくして一般的等価物と等置関係を結ぶ諸商品を生産する現実的諸労働は，人間労働一般という共通の性格に還元され，独自的な形態を日々受けとる。これによって，商品世界内部において，労働の一般的人間的性格が，価値を形成するという労働の独自的・社会的性格を形成する。かかる一般的等価物は社会的慣習によって，金という貨幣商品にゆ着する。

以上において，商品に内在する内的対立は価値形態において外化し，その固有の表現形態を持つことを解明した。具体的有用労働が同時に一般的労働でなければならず，私的労働が同時に社会的労働でなければならないという矛盾は，「廻り道」を通じてのみ外的に表現される。したがって，下平尾教授が次の如く主張されるのは謬見である。

「……しかし，あくまでも使用価値と価値との対立を矛盾として設定して，価値形態の移行をおこなおうとするならば，それは価値形態の問題ではなく，交換過程の問題となる。商品の使用価値と価値との規定が矛盾する範疇としてあらわれるのは商品交換という現実的運動においてのみである。[6]」

交換過程は交換関係に規定された人と人との実在的な交換という関係行為に他ならない。この現実的運動の内在的動力こそ，商品に内在する矛盾であり，この運動はこの矛盾が自からを実現する運動形態である。決して，矛盾がそこにおいていかに現われるか，という次元ではない。交換関係において矛盾があるがゆえに，それが過程の内的動因として，運動を推進させたのである。交換過程の何であるかを解明する前に，その内的動因としての矛盾の何であるかが措定されていなければならない。下平尾教授が示されるように運動が矛盾を措定したのでは転倒である。矛盾が運動を実現する。矛盾があらわれるのは，価値形態論においてである。この点は交換過程を論ずる時に更に立ち帰ろう。交換過程は交換関係に規定された人と人との関係行為であり，それは交換関係を含むが，区別される。交換過程を理解するには，交換関係の何であるか，がより一層解明されなければならない。

1）ヘーゲル『大論理学』武市訳，岩波書店，中巻，17頁。
2）久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』
3）下平尾勲『貨幣と信用』，新評論，第1章「価値形態論」，とりわけ，第1節参照のこと。
4）同上，61頁。
5）K. Marx, Grundrisse d.Kritik d. Politischen Ökonomie, S. 65.
6）下平尾勲，前掲書，62頁。

第三節　商品生産の一般的生産関係

商品と商品との交換関係において，商品に内在する諸矛盾がその外的表現形態を受けとることを見てきた。だが，基本的な問題が残されている。価値の実体は人間労働一般であることを内在的に演繹し，それが労働生産物と労働生産物との関係を通じて，連関せしめられ，外的に現象することを見てきた。だが，かかる関係の何であるか，ということは不問にしてきた。このことの解明を通じて，商品生産の一般的生産関係が何であるのか，労働が何故に価値になるのか，が解明される。

マルクスは商品の神秘的性格は価値諸規定の内容から生ずるものではないとされる。すなわち，価値の実体的諸規定からは価値としての商品の超感性的でその様な対象性，神秘性は出てこないのである。価値の実体的諸規定は社会的諸形態のいかんを問わず，妥当するが，それが何故に幻の様な対象性として現われるのかということ，これをマルクスは商品形態そのものから発生するとされる。

「商品形態は，人間自身の労働の社会的諸性格を，労働生産物そのものの対象的諸性格として，これらの諸物の社会的な自然諸属性として，人間の眼に反映させ，したがってまた総労働に対する生産者たちの社会的関係を，彼等の外部に実存する諸対象の社会的な一関係として人間の眼に反映させるということ，これである。この交替によって労働諸生産物は……商品となるのである。」(『資』Ⅰ，172頁)

私的労働と総労働に対する社会的関係を労働生産物と労働生産物との関係に対象化させることによって労働生産物は商品形態となる。したがって，労働生産物と労働生産物との関係は物理的な物と物との関係ではなく，人々の意識，あるいは共同主観とは関わりなく存在するところの社会的な関係である。だが，人の意識には物と物との関係，あるいは物と物との交換比率，というように直接的に映じるのである。それは決して人々の眼が誤っているの

ではなく，誰の眼にもそう見えるし，現実にそのように現われているのである。こうした社会的関係も一つの物質であり，我々はかかる物質の存在を認めないわけにはいかない。この人々の意識の外にあり，人々を支配するところの物とは，単なる知覚で知ることのできる物理的な物ではなく，その素材を質料的担い手とすることによって素材と結びつき，しかも，それとは区別された社会的規定を帯びた関係に他ならない。

商品生産社会は生産者の諸労働そのものにおける人と人との直接的な関係によって形成されるのではなく，物象と物象との社会的諸関係を通じた，「廻り道」を通じた社会形成である。この物象と物象との社会的関係に人々が従わねばならぬ商品世界のこの物神的性格は商品を生産する労働の独自的・社会的性格から生じる。すなわち，この独自的社会的労働が物神性の主体である。

「諸使用対象が商品となるのは，総じて，それらが相互に独立して営まれる私的諸労働の生産物であるからに他ならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働を形成する。生産者たちは，彼等の労働生産物の交換によってはじめて社会的接触を結ぶのであるから，彼等の私的諸労働の独自的・社会的諸性格もまた，この交換の内部において初めて現象する。あるいは，私的諸労働は，交換が労働生産物をして，……入り込ませる諸連関により，事実上はじめて，社会的総労働の諸環たることを示す。」（同上，173頁）

「独立に営まれる私的労働」は相互にバラバラであり，私的生産者と私的生産者の社会的関係は交換という契機を通してはじめて形成される。より根源的には私的労働と私的労働との社会的関係を形成する。交換は私的生産者たちの社会的関係を実現する。労働生産物は，この社会的関係を実現するところの基体であり，質料的担い手である。この社会的関係が労働生産物に託され，したがって，労働生産物にその実体的性格とは無縁な社会的関係が事後的に対象化される。

価値とは，労働生産物に対象化された社会的関係であり，価値の物質性とはかかる関係的存在に他ならない。すなわち，価値とは商品生産の一般的生

産関係を示す概念に他ならない。すなわち，生産において主体的契機をなすのは労働であり，このことは生産関係にあっても真随をなし，その基軸をなすのは労働がいかなる関係に置かれているか，ということに他ならない。諸々の社会的生産におけるその相異の基準をなすものは，すなわち，生産関係を生産関係たらしめる本質的条件は，労働と労働とがいかなる関係に置かれているかということ，すなわち，「労働関係」に他ならない。この労働関係は人々の労働の成果としての生産物に対する関係を規定する。生産関係と分配関係は同じ，一つの関係の二つの側面である。

「商品生産者たちの一般的・社会的な生産関係なるものは，彼等がその諸生産物を諸商品として，つまり，諸価値として取扱い，この物象的形態において彼等の私的諸労働を同等な人間的労働として相互に連関させるという点にある……。」（同上，182頁）

商品生産における生産関係の基軸は労働生産物を相互に等置し，もって諸労働が現実的に連関せしめられているということを基礎に有する。かくして，労働が何故に価値として対象化されるのか，がわかる。交換関係に規定され，交換のために生産する労働は，その生産物において価値として対象化される。

価値がレアールな物ではなく，超感性的，幻影的なものであるということは，価値が以上の如く，生産関係に他ならないからである。人々が支配され，従わなければならないのは，この生産関係であるにもかかわらず，生産関係という社会的関係とは区別された物と物との自然的・物理的関係に規制されるように現象する。かくして，社会的関係と物理的な物と物との関係が合一する。かかるものとして，それは価値形態として現われる。この合一は等価形態の完成体としての貨幣において完成する。貨幣は生まれながらにして交換可能性にあるものとして現われる。

以上から明白なように，労働が何故に価値として対象化されるか，ということを説くということは商品生産の一般的生産関係を説くということであり，商品生産社会の存立の内的根拠を説くことに他ならない。商品相互の関係に規制されて人間が相対するというのが商品生産社会である。物象と物象との

社会的関係を通じた社会形成であり，私的生産者は交換という契機を通じて社会的物質代謝過程において，社会の構成者であることを見い出す。すなわち，「廻り道」を通じた社会形成である。労働相互の依存体系として，生産的諸労働の有機的編成体として社会が形成されなければならないが，それは特有の「廻り道」をしなければならない。したがって，人々は物と物との関係にのみ目を奪われる。

「（人々が）……実践的に関心を持つのは，彼等が自分の諸生産物と引き換えに他人の諸生産物をどれだけ受けとるか，つまり，どんな比率で諸生産物が交換されるかという問題である。」（同上，176頁）

この比率は不断に変動するとはいえ，それを調整するのは価値の大いさを商品生産に必要な社会的労働時間によって規定するという労働価値の量的原理である。価値の実体は労働であり，その大いさは時間で測られるということは，商品生産社会の第一義的説明原理である。だが，労働が価値になるということは，いかなる社会的生産においても妥当なことではなく，商品生産社会においてのみである。したがって，価値論を論証するということは，商品生産社会の成立の内的根拠が示されることによってなされるのである。商品の価値と使用価値，価値形態，等の商品世界の説明原理が妥当であるためには，その説明原理が根ざしているところの対象，商品生産社会そのものの成立の根拠が示されなければならない。

以上で，商品に内在する諸矛盾，その外的表現形態，かかる矛盾の存在形態が必然性において措定されているということが解明された。すなわち，商品生産の一般的生産関係の何であるかが解明された。この諸関係によって規定された人と人との実在的な関係行為に媒介された商品の運動，交換過程を分析しよう。

第四節　商品に内在的な諸矛盾と交換過程

商品生産の一般的生産関係に規定された諸人格が相互に現実的に相対し，その利害関係を現実に示すのは，商品の交換過程である。この生産関係によ

って人々の意識と行動は支配されるが，かかる生産関係の意識的担い手としての人格はその商品の所有者として現われる。所有とは客観的な生産関係の表現形態であり，それの意志的・法的表現形態に他ならない。法的表現形態としての所有は経済学の直接の対象とはならない。意志的関係としての所有，すなわち，自己のものであって他人のものでないという所有はいかに発生するであろうか。

所有が語られるのは何に対してか。客観的生産関係は人の意識から独立した客観的な過程的，関係的存在である。所有が語られるのは，物についてのみ，生産関係の質料的担い手としての素材であるところの，生産手段や労働生産物，労働力等について語られることである。物としての物に関して，生産関係に規定された人と人とが関係行為を持つ時に，その物に対する所有，非所有が発生する。所有は商品生産の一般的生産関係に媒介されて発生する。すなわち，交換関係に規定された人と人とが，交換という関係行為を切り結ぶ時所有が発生し，交換過程に媒介されて所有が実現する。かくして，マルクスは『資本論』における「交換過程」論の冒頭において次の如く述べるのである。

「諸商品は自身で市場に出かけることができず，また自身で自分たちを交換することができない。だから吾々は，それらの保護者たちを，さがし求めねばならぬ。諸商品は物であり，したがって，また人間に対して無抵抗である。もし，それらが従順でなければ，人間は暴力を用いることが，換言すれば，それらを手ごめにすることが，できる。これらの物を諸商品として相互に連関させるためには，商品保護者たちは，自分の意志をこれらの物にやどす諸人格として，相互に振舞わなければならぬ。かくして，一方の人格は他方の人格の同意をもってのみ，自分の商品を譲渡することによって他人の商品を吾がものとするのである。だから，彼等は，相互に私有権者として認めあわねばならぬ。この法的関係は――その形式は，法律的に発達していてもいなくても契約であるが，――そのうちに経済的関係が反映している――の意志関係である。この法的関係または意志関係の内容は，経済的関係そのもの

によって与えられている。諸人格は，ここではただ，商品の代表者として，したがって，また商品所有者として，相互的にのみ実存する。」（『資』Ⅰ，191頁）

商品の所有者が所有者となるのは，この所有者が経済的関係に規定された過程の人格的担い手としてである。経済的過程，関係に規定されて，その人格的荷い手が接触するときに物に対する意志関係として所有関係が発生する。所有が生産関係を規定するのではない。所有が生産関係を規定するというのは物象化論的転倒に他ならない。所有が発生する基礎にはその発生する母体としての生産関係がある。

所有権が自己労働に基づくものとして，その権源が主張される時，それは生産関係によって媒介されているのである。人が商品を自己のものとして主張するその権利意識は，自らその商品のために労働と煩労を費やしているのであるからという点に求められる。その労働における苦痛と困難が所有における意志関係を根拠づけ，それが法において所有権として確認される。意志的関係としての他人に対して自己のものと主張する権源を根拠づける法的根拠が自己の労働に基づく所有なのである。物象化された社会では，労働は苦痛であり，困難である。その代償として自己の労働の成果を所有できるのだと意識され，法律はそれを追認する。

もし，人あって，自己労働に基づく所有が商品生産における生産関係を規定するのだと思うならば，それは物象化の論理に捉われた商品生産者の流通界での意識そのものである。「自己労働に基づく所有」とは，商品生産の一般的生産関係をその内容として持つところの意志的・法的関係であり，その表現形態である。商品生産社会は物象と物象との関係を通じて形成される特有の社会であるということが，自明の常識としてその根拠が問われない時には，労働と所有との直接的一致が説かれることになる。だが，生産関係を内容とした意志関係を抜きにしては人々は接触しえないし，市民社会も形成されない。経済学はこの物神性をはぎとらなければならないが，これを抜きにして所有を語るとすれば，それはブルジョア社会の直接的な人々の意識への

埋没である。

以上において，物象の人格化としての商品所有者の何であるかが解明された。商品所有者が所有者となるのは，商品生産の一般的生産関係に規定された過程の意識的担当者としてなるのであって，商品所有者は物象の人格化である。他方で，商品所有者は「自分の意志をこれらの物に宿す」人格として，人と相対する。交換過程にあっては，商品は商品所有者の欲望充足の手段，すなわち，交換手段として現われる。商品は商品所有者の意志を吹き込まれたものとして，その意志関係の実現の荷い手として，したがって，商品は人格化された物象として現われる。かかるものとして商品は商品所有者の意志関係の実現の荷い手として交換過程に入り込む。「すべての商品はその所有者にとっては非使用価値であり，その非所有者にとっては使用価値である。だから，それらは，全面的に持ち手を交換しなければならぬ。」（同上，193頁）のである。

今までの論理展開において，商品に内在する使用価値と価値，具体的労働と抽象的人間的働，私的労働と社会的労働との矛盾の外的表現形態を交換関係に置かれた諸商品において措定したが，ついで，これらの商品の内在的諸矛盾を表現しているところの諸関係に規定された人と人との関係行為が問題となるや，そこにおいて「物象の人格化と人格の物象化」との対立が過程の表面に登場することを発見した。かくして，商品に内在的諸矛盾が出そろった。それらは階層性において把握された。交換関係に置かれた諸商品の内部に存在する矛盾が，今や過程の動力として過程を進める。すなわち，矛盾を構成する諸契機は一方では，相互依存性，相互補足性において把握され，他方では，その相互排除性において把握された。後者の相互排除性という対立の一側面たる矛盾性は対立のうちに内蔵されており，矛盾はいまだ潜在的であった。だが，今や，商品は過程の意識的荷い手を得ることによって，対立の一側面たる矛盾性が顕在化する。すなわち，他者の否定の上に自己を実現しえるという相互排除，闘争矛盾がもって自らを実現する運動形態を措定する。

自己にとっての非使用価値である商品と他人の自己にとっての使用価値としての商品との交換は「それらを諸価値として相互に連関させ，それらを諸価値として実現させ」なければならない。諸商品は「みずからを諸使用価値として実現しうる前に，みずからを諸価値として実現しなければならぬのである」。「他方において諸商品は，みずからを諸価値として実現しうる前に諸使用価値たる実を示さねばならぬ。」のである。（同上，193頁）

価値として商品が実現されるには，使用価値としての商品の実現が解決しておらなければならず，使用価値としての実現には価値としての実現が前提となる。一方の解決は他方の解決に依存する（相互依存性）し，他方では，他方の解決ということがなければ一方は解決しうる（相互排除性）。価値と使用価値の内的対立はその実現において前面に出てくる。

商品所有者に着目するならば，過程は次の如く現われる。

「商品所有者は誰でも，自分の欲望をみたす使用価値をもつ他の商品と引換えにのみ，自分の商品を譲渡しようとする。そのかぎりでは，交換は彼にとり，もっぱら個別的な過程である。他方において彼は，自分の商品を価値として，つまり，同じ価値のある彼の好きな他の商品のいずれもで，――彼自身の商品が，この他の商品の所有者にとって使用価値をもつか否かをとわず，――実現しようと欲する。そのかぎりでは交換は彼にとり，一般的，社会的な過程である。しかし同じ過程は，同時にすべての商品所有者にとり，もっぱら個別的であると共に，もっぱら一般的，社会的であることはできない。」（同上，194頁）

以上の点を「もっと立入って注意してみよう」。

「どの商品所有者にとっても，他人の商品はいずれも自分の商品の特殊的等価としての意義をもつのであり，したがって，自分の商品は他のすべての商品の一般的な等価として意義をもつ。だが，すべての商品所有者が同じことをするのだから，どの商品も一般的な等価ではなく，したがって，また諸商品は，それらが諸価値として等置され諸々の価値の大いさとして比較されあう一般的な相対的価値形態をもたないのである。だからそれらは，総じて，

諸商品として対立しあうのではなく，諸生産物または諸使用価値として対立しあうにすぎない。」（同上，194頁）

価値及び使用価値としての商品の実現がなされるかぎりにおいて，具体的有用労働は同時に抽象的人間労働であり，私的労働は同時に一般的，社会的労働であることを実現する。だが，全面的な交換にあっては，具体的有用労働は同時に抽象的人間労働であり，私的労働は同時に社会的労働であることはできない。全面的な商品の交換過程にあっては諸商品は現実的に対立しあう。

$$\text{A商品} = \begin{cases} \text{B商品} \\ \text{C商品} \\ \text{D商品} \\ \vdots \end{cases}$$

商品の価値表現のこの形式にあっては，この等式は逆の連関を含んでおり，A商品は他の諸商品に対して一般的等価形態になる。だが，このことは同時にB商品も同じように一般的等価形態になるし，またなりうる。B商品もA商品と同じく価値と使用価値の統一物に他ならないからである。かくして，Bに妥当することは，C，D，E，……の各商品にも妥当し，全ての商品が一般的等価物として自らを主張する。全面的な交換にあっては，全ての商品が一般的等価，社会的一般的労働の化身たらんとする。諸商品は他を排除して自らを一般的等価の地位に立とうとする。商品は現実的な相互排除において関係しあう。

かかる現実的矛盾は実践的にしか真に解決されない。それがゆえに現実的矛盾なのである。実践的に解決されるとはいえ，これは理論的に説明できないところのものを実践に解消しているのではない。この場合の実践とは，すでに明らかにした商品生産の一般的生産関係に規定された商品所有者の行為である。この現実的な矛盾は他の側面からすれば，物象の人格化と人格の物象化との間の矛盾でもある。

「商品本性の諸法則が商品所有者たちの自然本能において自らを実証したのだ。」（同上，194頁）

すなわち，「社会的行為」が一定の商品を一般的等価たらしめることによって，全面的交換の矛盾は解決される。「他のすべての諸商品の社会的行動が，それらの諸商品が自分たちの諸価値を全面的に表示するための，ある一定の商品を排除する。」（同上，195頁）ことによって，かかる商品は社会的に妥当な一般的等価となる。

「相互に他を否定する交換過程の矛盾に直面した諸商品は，その矛盾の極，どれか一つの商品を商品仲間から排除して，それに『一般的等価』たる形態規定を付与し，一般的等価たるその商品との対立的な連関を通じて相互に諸価値として，したがって，また諸商品として関連しあうこととなる。いわば，すべての商品が潜在的にあるいは可能性としてもっている等価性を脱ぎ捨てて，それをすべて排除された一商品に付着せしめるという『共同作業』を行い，……[1]。」

この引用は，富塚良三教授による「全面的交換の矛盾」の解決の仕方についての説明である。だが，この説明はどうして相互排除の解決といえるであろうか。ある特定商品は一般的等価として排除され，他の諸商品は一般的等価たることを主張することをやめること，ここでは諸商品の諸対立はなく，対立は和解せしめられている。「すべての商品が潜在的にあるいは可能性としてもっている等価性を脱ぎ捨てて」他の排除された商品に付着させると主張される。何故に自己の等価性を商品は主張しないのか。それが商品の価値の本性ではないのか。諸商品が等価性を脱ぎ捨てるのであれば，相互排除ではないではないか。富塚教授は矛盾を調和的に解されている。

自己を一般的等価たらしめようとして諸商品が自己主張し，相互に排除しあうという現実的な対立は，闘争矛盾に他ならない。すなわち，この矛盾は闘争矛盾であるがゆえに，一方が他方を制圧することによって，誰かが勝者となることによって解決する。特定商品が一般的等価物として他を押しのけて成り上がることによって解決される。勝者が決定されないうちはこの闘争

矛盾は繰り返されるのみである。

「商品と貨幣とへの商品の二重化によってかかる形態が窮極的に達成されるまでは，止まりも休みもしない。」（同上195頁）

「それはかわるがわる，かつ暫時的に，あれやこれやの商品に帰属する。だが，それは商品交換の発展につれて，もっぱら，特殊的な商品種類にこびりつく，――または貨幣形態に結晶する。」（同上，197～198頁）

現実的矛盾はその固有の属性として，それの解決を要求する。矛盾の発生は同時にその解決の発生である。相互に排除しあう矛盾は相互に排除することによって解決され，強いもの，したがって，貨幣としてよりふさわしいものが勝利の栄冠を獲得する。貨幣の発生は商品に内在する諸矛盾をその生成の生みの親となす。価値形態論においても貨幣が与えられていた。それはまず，一般的等価形態として与えられた。一般的等価形態への展開された価値形態の移行においては，商品に内在する諸矛盾がいかに解決されるかについては述べていない。その解決された形態のみが示されていたのである。その解決された形態のみを表示しているのである。だが，交換過程論ではまさにその解決される仕方様式が問題となったのである。ここにおいて，貨幣はまさに概念の自己展開において発生した。概念が商品の本性をよりよく反映していれば，商品の運動によって生み出される貨幣の生成過程は概念の自己運動として反映されるのである。

貨幣の発生は商品の内在的諸矛盾を解決するが，止揚しない。それは，商品の内在的諸矛盾がもって自らを実現する運動形態を措定するのである。

「すでに見たように，諸商品の交換過程は，矛盾した，相互に排除しあう，諸連関を含んでいる。商品の発展は，これらの矛盾を止揚するのではなく，これらの矛盾がそれにおいて運動しうる形態を創造するのである。かくの如きは，総じて，現実的矛盾がもって自らを解決する方法である。」（同上，220頁）

かくして，貨幣の発生は矛盾を止揚せず，商品流通という運動形態を創造する。物々交換において含まれていた商品に内在する諸矛盾は，貨幣の発生

によって，その場所的，時間的，個人的諸制限を打破され，一般化する。同時に，その矛盾は恐慌の抽象的可能性を措定する。

1）富塚良三『恐慌論研究』，未来社，262頁。